# ショーン・フェイ著／高井ゆと里訳（明石書店　2022年）『トランスジェンダー問題　議論は正義のために』

葛原千景*

本著作には既に多くの優れた書評があることから、本稿では本の要約に留まらず、あえて個人的な視点を交えることで、日本の文脈から本の内容を内在的に読むための助けとなるよう筆を執りたい。なお、自死に関する記述があることを最初に注意しておく。

私が大学院に入学して一年が経ったころ、親しかったトランスジェンダーの女性がこの世を去ったと、人づてに知らされた。彼女の死の真相は、世間はおろか友人である私にすら知らされなかった。公の場で彼女を悼む事が私には出来なかった。日本に自殺者が多いとしても、私が一生涯の別れを余儀なくされた初めての友人が彼女であったことの意味を考えずにはいられなかった。ほどなくして日本では、「邪悪で強大な力を持ったトランスジェンダーとその信奉者たちが、（シス）女性を危険に曝そうとしている」という大騒ぎが始まった。もし、「私は本当は男 / 女だと言うだけ」で、他者との相互関係の中で複雑に形成される社会的性別すらも瞬く間に変えてしまえるほど、トランスが計り知れない力を持っているとするならば、なぜ多くの名も知れぬトランスが死を選ぶのか、なぜその数多の死は嘆かれないのか。トランスたちの命に、喪失として悼まれるような価値を見出す人は、この社会にいったいどれほど存在するだろうか。家族、学校、職場、メディアから無価値どころか有害とされたその人々は、どれだけの孤独に曝され、生きるために必要な資源をどれだけ奪われただろうか。

『トランスジェンダー問題』の冒頭は、イギリスで教師をしていたトランス女性のルーシー・メドゥス氏が、自死してしまった痛ましい話から始まる。彼女は死の数か月前、自身の性別移行を勤務先の学校から全校の保護者向けニュースレターで晒され、あろうことか地元の新聞を飛び越え全国にまで侮蔑的な表現を伴うアウティングをされていた。トランスとアウティングの関係性は容易ではない。日々、全ての人間の性別に関する情報は当然の如く「アウティング」され、性別移行を始めたトランスジェンダーは、否応なく「カミングアウト」させられるからだ。私的なプライバシー権を主張し、開示を一定程度コントロールできる不可視的な属性と異なり、出生時に割り当てられた名前や性別情報は必要以上に明け透けにされる。仮にその情報と社会生活上の性別が乖離する矛盾があっても、容易に変更することは多くの国でできない。より困難なことに、社会的な性別移行は、自動的に望まざるカミングアウトを意味する。多くの場合、性別移行は学校や職場といった公的領域はおろか、性別という情報に基づいて人口を管理する国家の権力にすら関わる。あるいは、法律上の氏名・性別や過去を知る無数の他者は自身の命綱を握る危険な共犯者となる。多くの共犯者は許可なく言いふらしたり、「うっかり」口を滑らせて、トランスが身を潜めることを邪魔する。一度「秘密」が出まわれば、せき止めようとする甲斐むなしく、新しくやってきた者へいつの間にか伝播する。だからこそ、トランスたちは早々に法的性別を移行し、時に過去の自分すら捨てて生きることを、余儀なくされてきた。分かりやすい一例に、法的性別移行をした男女別学の学校出身者は、就職差別や就職後言いふらされるのを覚悟でトランスであることを開示するか、過去の学歴を含め様々な自身の歴史を失うかといった選択に迫られるという話がある。それ以外にも過

*東京大学　大学院


DOI：10.24567/0002003778

去は常につきまとう。

このように、他者の性別や性別移行の歴史を知ることは、時に人の命に関わる情報を握っていることと同じであることを多くの人は知らない。この側面にだけ焦点をあてても、「私は本当は、男や女やノンバイナリーであると言う」ことすらも、多くの場合決死の行為であることが明白である。陰謀論者たちが妄想するような、トランスの人々が尊重されたり、あろうことか優遇されたりする世界はおよそ存在しない。勿論、性別の宣言や医学的診断書がジェンダー化された空間への特別パスになるわけでもない。むしろ、割り当てられた性別とは違う性別を生きようとする、あるいは自身のジェンダー・アイデンティティを宣言をすることにすら、断続的に無数の罰が待ち構えているのが現実である。アイデンティティに懸けられた重みに無知でいられる人々は、トランスの生活から身体の一部のみを切り取り、トイレ・大衆浴場・外性器の状態に関する侵襲的な問いのみに戯画化されたトランス問題を「おしゃべり」のネタとして消費する。そうした人々は、トランスの人々を自分とは違う世界に住む怪物か何かと勘違いしているのだろうか。（耳を傾ければ）巷に溢れかえるトランスの人々が日々直面する多様な苦難は、トランス差別に無縁の学者が「発見」するまで存在しないことになっているのだろうか。あるいは、トランスの有名人が涙ながらに語る「悲劇」以外は、「おかしな人たち」の聞くに値しない些細な出来事と思われているのだろうか。結局のところ、トランスの人々は、野垂れ死んでもかまわない、価値のない人たちだと思われているのだろうか。

ショーン・フェイは本書で、このように無知な大衆の関心に基づいて大騒ぎされている「トランスジェンダー問題」が、いかに現実のトランスの人々が直面している問題と乖離しているかを再確認する。そして、本の射程はトイレや性器といった狭小な「問題」のみに留まらず、より広範な社会正義に及ぶ。すなわち、フェイが描くように、トランスを苦しめているのは単に性別違和だけではない。家族・学校・職場といった生活に大きな影響を持つ他者や場所からの拒絶やいじめ、その帰結として貧困状態に陥ったり安全な住居が得られないこと。福祉を必要とする人々に対するサポートがトランスを排除し続けていること（1章・3章）。こうした状況の中で、国家はトランスの人々の数少ない収入源となりうるセックスワークを刑罰化し、結果として働く人たちの労働環境をより危険にしていること（4章）。警察や監獄といった国家の独占する暴力が資本主義と結びつき、人種やジェンダーを不平等に管理するシステムを構築していること（5章）。父権的な医療制度がトランスの人々に対して虐待的な対応をしたり、存在を抹消すること（2章）。非規範的な性全般に対する包括的な不正義、それと同時に主流のLGBのアドボカシーが、社会に耳障りの良い上辺の活動に収束してしまうこと（6章）。家父長制に基づくジェンダーが人間を管理すること（7章）である。これらは、あらゆる人々をも苦しめる社会構造と同根である。だからこそ、トランスの解放は全ての人に対する不正義からの解放を意味するとフェイは主張し、真の正義を私たちに呼びかけるのだ。

トランスの問題について本当に「おしゃべり」したいならば、まずは本書の内容について知ることから始めてはどうだろうか。